

田村 明の思想に影響を及ぼした家族、そして、

田村千尋

プロローグ

光陰、矢のごとしである。田村明が 2010 年 1 月 25 日、永眠し、早 6 年半が過ぎた。NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会も発足して明のことを考える時間が増え、心の内面がそれまでとは違った形で見えて来たような思いがある。私は兄弟の中では一人、純理系の教育を受けて社会に出た。兄弟とは専門に拘わる話ができなかったのは残念だったが、社会で起きる様々な事象について兄たちが意見を戦わせ、批評しあう姿を見て、またその内容を聞いて自分の世界を広げ、常識を学んでいた思いがある。一方、常時、末弟の立場から見ているので生涯を通して兄達を対比的に見ながら過ごしていた。田村明の研究は図らずも、それやこれやが絡んで知らぬ間に自分のルーツ探しをしていることに気が付いた。よき兄たちに恵まれ、自分自身も老いてここまで来た。今、こうして両親を始め、兄たちに思いを馳せることは誠に意味深いものがある。

1 父

父、幸太郎は 1889.1.20 苦難を背負って生まれた。新潟は村上の宮大工の頭領だったが、ある棟上式に高所から落下、急逝してしまう。幸太郎はそのため梅津家の養子に出され実の父母を知らないまま成長したのである。その梅津家は散髪屋だった、断髪令(1871)が発令され、人々はこぞって理髪師を訪れたから家計は豊かだったようだ。町の人々の教育は小学校どまりが普通だったが、義父は幸太郎を中学（現村上高校）まで進学させてくれた。恵まれた環境で旧制中学の 5 年間で過ごせたのである。この事は後の幸太郎の人生に大きな意味を持つてくることになる。丁度、早稲田出身の気鋭の岡村先生が赴任し幸太郎を先導し、幸太郎もそれに応えた。岡村先生を師として生涯、敬愛しつづけた。家の散髪屋には多くの人々が集まり、言わば当時の寄り合いでもあった、何かと大人の会話を聞き、善し悪しの判断を聞きながら意外に思慮深い青年に育ったのではないだろうか。

一方、村上には城下町、武士階級が幅をきかせ、鱒の權益を握って明治維新後も武士の生活は潤っていた。子弟の教育にもこの地では高等教育に力を入れていた例外的な地域のようである。そんな中、幸太郎は中学で学び、何時もトップを競っていた。非常に向学心の強い、青年であったであろう事は後年の子供達への接し方からも想像できる。ところが大人になる寸前、義父の事業失敗、義母の不貞に始まる離婚騒ぎが勃発、養父からはあらぬ言いがかりを受け、とうとう義父とも決別、自分一人の道を歩まなければならなくなる。未成年が一人、自分だけで生きていかねばならぬ、孤独な毎日が待っていたのである。

成人する時、生みの親の名前、「田村」を復帰させた。幸太郎は改めて田村家の創設者に

なったのである。しかし過酷な大人への第一歩だった。この状況から進学はあきらめ、代用教員という資格でかろうじて自活の道を確保する。いずれにしろ、そのまま孤独に追い込まれて行くことに、幸太郎はあてもなく街をさまよひ、今まで住んで、見てきた街だが、そこにキリスト教会のあることを発見する。ティーンエイジの青年がうつろいの中、その門をくぐった姿を考えると何かこみ上げてくるものがある。教会活動そのものに活路を見いだした訳ではなかったが、加藤文さんというお姉さん役の夫人に優しい慰めの言葉を受けこの教会に行くことに心の安寧を得た。彼女は後に上海の税関長になる紅松氏と結婚し、幸太郎は紅松氏との交流も始まる。しばらくして彼らは上海に行くことになるが、身の上話を聞いていた紅松夫妻は不憫を感じていたのだろう、夫妻は幸太郎の孤独の日々を慰めてやろう紅松氏の秘書役で上海に呼んでくれたのである。

ところがそこで大事件に遭遇する。一人の女性が暴漢の撃った流れ弾にあたり、腕や腰を打たれて倒れた。介抱したが、何んとその女性は村上中学の先輩、宝田一蔵の妻、愛子であったという。偶然起きたこと事件で宝田一蔵との再会と、吉田家を知ることになる。暫くして帰国した幸太郎は愛子の実家、吉田亀太郎、まち夫妻宅を訪れ事件の報告をする。幸太郎にとってこの家の雰囲気はかつて感じたことのない暖かさに満ちあふれた別天地だった。亀太郎夫妻は東北開拓伝道師、愛子の事件の話聞き、幸太郎は温かいもてなしを受け嬉しかったに違いない。そしてそこに、後、妻となる母、吉田忠子との出会いがあったことになる。だが、帰国当時の幸太郎は上海かぶれでキザな男と映った、それに職が定まらず転々と仕事を替えていたという。一方、忠子は教会員の一人と既に婚約関係にあった、従って幸太郎は全く眼中になかったという。幸太郎はそれと知らずに通い詰めたのである。ところが、その婚約者は婚約して、半年もしないうちに突然病を得て帰らぬ人になってしまう、忠子は悲嘆にくれるという次第である。

その頃、幸太郎は初めて自分の思いに叶った職業に遭遇する。ナショナル金銭登録機（NCR）の販売員である。日本の商売にはソロバンと大福帳が主流だった頃、金庫と記帳を同時に機械的に行う販売戦略は近代的だが、日本の商売は信用という言葉が可成り定着した社会になっており、少なくとも当初の頃、一般の商店には馴染みにくいシステム商品だった。しかし、街には次第にデパートなどの販売拠点が広がり、その受容が拡大していく、さらに少し大きな商店では大福帳の管理も大変で、金銭登録機（レジスター）が売れるようになっていった。

一方、無教会主義を標榜した内村鑑三のキリスト教講演会が東京を中心にして開催され、話題になっていた。まだ、テレビ、ラジオ、電話のない時代で唯一の社会的な通信媒体は新聞だった時代である。幸太郎も内村の説法に惹かれ、それを聴講して大変なインパクトを受けたのである。教会への足はすっかり内村の方に向けられるようになる。このうして、幸太郎の精神状態に大きな変化が現れ、人が変わったように清潔感のある壮年になっていったという。吉田家では幸太郎の評価がどんどん良くなって行き、祖母、まちの幸太郎への印象がすっかり変わる。許嫁の他界に遭遇した忠子のことを思った祖母は幸太郎との結

婚を促したのである。忠子もそれを受け入れることになる。こうして幸太郎、忠子夫妻の誕生は宝田一蔵夫妻の仲人で行われた。

結婚して幸太郎は父以上に心底、敬愛して過ごした。亀太郎が死の床にあった時、毎日のように亀太郎を見舞い、多くのことを聞き取って記録した。そして、一年後に「吉田亀太郎追憶集」を発刊させたのである。幸太郎はそのタイトルを「天国に旅立たんとする父の言葉」とした。自分にとっては本来、義父であろうがあえて「父の言葉」としたところに彼の心情が強く伝わってくる。全体は各人1、2ページの思い出話であるが21ページに及ぶその記録、父の思いの程が伝わってくる。

2 母、忠子

母、忠子は1897.7.18福島県は相馬中村に生まれた。母方の父は吉田亀太郎、母はまち、一男、五女の末っ子である。祖父、亀太郎は石油化学に興味を持ち、築地にあった化学試験所で化学の勉強をすることができるようになった。たまたまその近所に教会があり讃美歌の歌声や、通りがかりには話も聞かれる状況にあったという。多くの変節を超えて亀太郎は基督教に回心、その教会の会員、石黒まちと結婚、「東北開拓伝道師」として仙台に赴く、苦勞をしてこの地にその成果を見るに至った。次の開拓地として相馬中村が選ばれた。しかし、亀太郎がこの地で伝道するには相当大きな苦難が待ち構えていた。この地は仙台から見ればかなりの田舎、村、特有の閉鎖的な社会であるだけでなく、もともと、仏教、神道のいがみあいもあって人々の話題も現今のような広域なものほとんど無かったからどうしても地域内の勢力争いの様相を呈していた。そこにあらたに基督教が加わり、さらに村全体が殺伐とした状況になる。亀太郎は周辺の中に一部の理解者を得ていくが亀太郎の自伝（吉田亀太郎追憶集より）によれば困難を極めたようである。

そんな世界の中で、忠子はここに生を受け、小学生まで育つ、しかし、手厳しい虐めにあい、度々、子供達に追いかけられ、石を投げられ、泣かされた。基督教というだけでも村民からの排他は尋常ではなかった。亀太郎はそんな中でも中学の建設を推進するなど、教育にも心を向けた。しかし、祖母、まちは娘たちが福島弁になって行くことに子供達の将来に不安を感じ、東京にもどることを亀太郎に進言し、遂に浦和にて教会活動をするようになるのである。こうして忠子はその青春時代を浦和で過ごすことになる。小学校は転校を2回、勉強せずとも成績は常に上位だったそうで、祖母は母を母校の横浜共立に進学させた。成長する中で次第に音楽に対する情熱が高まり上野の音楽学校（現、芸大）を目指すようになる。この頃、教育制度も確立し、横浜共立の様に典型的なミッションスクール卒業では受験資格なしとされ、母は最期の一年を青山学院女子部に転学したのである。無事、音楽学校に入学したが、実はその学校に行けるようになったのは教会関係の人物からのスポンサーシップによるものだった。この人が事業に失敗、お金が続かず、音楽家の夢は砕かれてしまったのである。このショックに母の趣向はもう一つの好きな絵画の



1962年、明、千尋が結婚した。父も母も自分の好きな仕事を続け、晩年の数年は充実した日々だった。しかし、思い起こせば、両親は金婚式には及ばなかったし、25年の銀婚式は1945年、まだ戦争最中、二人の子供は出征、防空官制で夜は殆ど暗闇の中で毎晩過ごした。両親を祝う状況は皆無だった。その年の8月戦争は終わるが食物を得るのに皆、必死だった。

世界に没頭する。当時、絶大なファンを集めていた竹久夢二の様な絵を沢山描いていた。やがて教会のメンバーとの婚約、結婚前に死別と沢山の予期せぬ事態に振り回された。

精神的にかなり追い込まれた母、それを察した祖母からの提案を受け、幸太郎との結婚を受け入れた。幸太郎は忠子に優しくかった。

「パパは私のことを初めから終わりまで『忠子』と呼んでくれたのよ」、に尽きる。当時の男たちは自分の妻を名前では呼ばず、大抵、「オイ」だった。おそらく父は紅松氏のリベラルな家庭を見てこれにしようと思ったのだろう。ある意味で二人は既に民主主義

を地でいっていた、そのまま、田村家を作ったと考えてもおかしくない。子供たちは両親を「パパ、ママ」で通した。

3 四人の子供達と名前

人が子供を授かると、最初にする大事な仕事は名前をつけることである。父が直接、語ったことではないが子供たちの名前には父の半生をいろいろ想像させられ、苦悩のほどにはフットこみ上げてくるものがある。母、忠子と初めての出会い、義父母になる亀太郎、まちの心の温かさ、これがクリスチャンホームと一瞬にして憧れになったのであろう。いくつかの試練を経てようやく忠子との結婚が許された。間違いなく嬉しかったに違いない。最初に以下の表の如く、父の思いと由来を記し、私から見た兄弟の性格を書いてみた。

	名前	父の思いと由来	千尋から見たそれぞれの性格
1921/8/7	忠幸	両親の名から一文字づつ	几帳面、コツコツ型、計画的、現実的、
1923/3/30	義也	旧約聖書、ヨシュア記	直観的、一点集中的、追及的、非現実的
1926/7/25	明	宇宙太、日月、本文中	計画的、現実的、追及的、分析的、俯瞰的
1930/7/11	千尋	海の深さ、女子願望	集中的、分析的、非現実的、試行錯誤型

3-1 忠幸(長男): 父にとって亀太郎、まち夫妻は理想の夫婦と見えただろう。キ

リスト教信者のつましい生活と夫婦間のやりとりなど、実の父母、養父母より敬愛すべき存在と映った。前項で記したように「亀太郎追悼集」の出版にむけ努力した実体は父の思いを如実に示している。この夫婦の娘、忠子は利発で物事の取り組みに率直、豊かな発信力にふれ結婚は想像以上に楽しかったに違いない。しかも、後に聞けば婚約者の死別を超えて自分との結婚を承諾してくれたこと、感謝にたえなかつただろう。第一子に幸太郎、忠子から一文字づつをとり、母の字を上にした。

この時代をふりかえると自由民権運動や大正ロマンというわずかに明かりの見える民衆の動きもあった。欧米文化にかなりあこがれを抱いていた二人だから新婚時代の社会状況は良い方を取ればそれほど悪くはなかった。かくして両親の期待の長男は忠実に親の言うことを聞き、守ろうと努力した兄である。幼い頃は可成り性格の異なる義也と対峙し、二人で一緒に遊ぶという姿はあまりなかったのではないだろうか、少なくとも我らが弟たちから見て二人はそれぞれ独立していた。

3-2 義也（次男）： 忠幸の誕生で心に余裕ができた父にとって次男の誕生は、神への感謝であつたに違いない。村上キリスト教会の扉を開き、心の平安を得、また、忠子を知るチャンスにもなった、自分をここまで導びいてくださった。現実起きてきたことを思えば、何者かに導かれるようにこの信仰の道に入った。その上、最後の一点は紛れもなく内村鑑三が主宰する聖書講義に参加するようになってからのことである。そのことが転機となって忠子との結婚、キリスト教信仰の道に迷いがなくなった。神への感謝が湧き出るようにあふれたのであろう。父は第二子にヨシュア、義也の名を与えた。誕生日は正確には4月3日生まれだったのを3月30日として届を出し、早生まれとした。当時はそういうことが出来たし、流行ったようである。義也が生まれて5ヶ月後に、関東大震災が東京全土を壊滅してしまう。東京崩壊で会社は大阪に会社を移転させ、一時、大阪は十三に一年ほど住むことになるが、東京復興にわき始め、NCRも東京での営業を再開し田村家も帰京することになる。

3-3 明（三男）：大正15年、昭和の始まり



明2歳の誕生日、まだにこにこするが言葉はしゃべらないので、耳が遠いのではないかと心配したという。母の思いは自分の子供達には洋式のベビー服と思っていた、母は器用な人で結局、4人の子供たちのベビー服は全て自分で作ったのである。当時は和裁は学校では女子の必須の習い事だったが、横浜共立女子ではそれほど重んじられてはいなかったようだ。それでも父の着物を作ったりしていたからどこかで習ったのだろう。ともかく洋式のベビー服は街には売られていない頃だったから、とてつもないお金を出せば輸入品はあつたろうが全部、母の立場では自分で作るより方法はなかった。要所要所を抑えることのできる人でこの写真でもわかるが、なにか袋のような形を作り、袖をつけたというかたちであるが見た目に可愛く仕上がっている。洋式のベビー服は写真などで見ていてその外観からコツを発見することのできる人だった。明にもそれが伝わっているような気がする。母はまた、数値的な距離感や地理的な方向感覚が男性のように優れていたことを思い出す。地図を描かせると紙の上に全体をバランスよく配置し、的確に曲がり角の要所要所の道しるべを記憶し、配置してくれた。

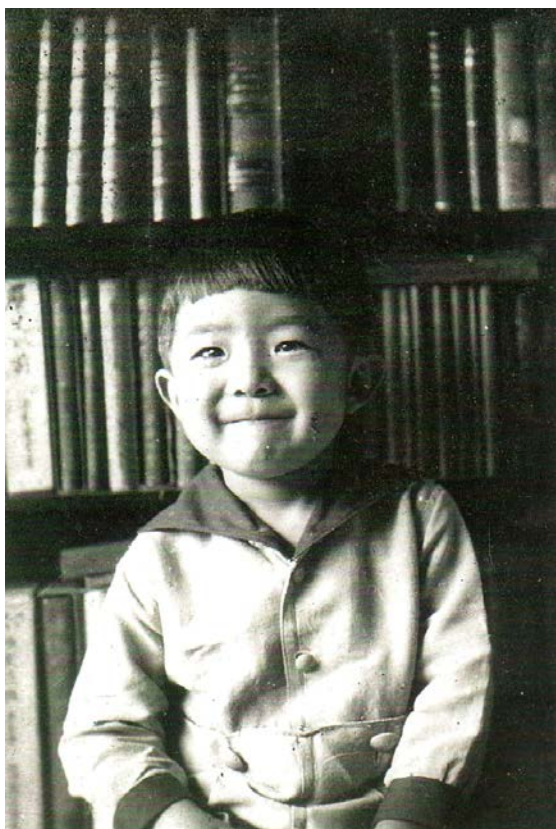
という、日本現代史における一つの分水嶺の年に田村家の三男として生を受た。両親にとって 3 人目の育児ともなれば多少は手慣れてきており、そのことでバタバタすることはない。しかし、社会状況は、そこここに不安なニュースが迫って来ていた。3 人目の男の子で始めて父は自分の夢を伝えようとした。既に記したように、父の青年時代の苦悩から救われるようにして自分の立ち位置を獲得したこれまでの半生は祈りの世界だったのではないかと思う。その祈りが聴かれ理想のように思ったホームが与えられた。父の祈りは何時も感心するほど心がこもっていた、思えば「お祈り」は首を垂れてするが心は天を向き、空を見上げている。広大無辺の宇宙が神の城という意識もある。父が最初、考えた名前はその「宇宙太（うちゅうた）」、だったという。この話は明も書いているが私も母から聞いた話だ。しかし、母はこの名前では「人にいじめられる」と直感、最大の抵抗をしたと話す。母が経験した幼少期の苦悩と重なる。父は、それならば、と「日月」と書いて「うちゅう」と読ませる、を提案した。しかし、これも母に反対され、結局、日月を一文字にした平凡な「明（あきら）になったという。当時、明治天皇の最初の文字「明」からとって名付けられた人が多かったので人には明治から取ったと思われがちだが父の真意は異なる。宏大な宇宙観を持てるように、との思いだったのである。奥に秘められ見えなくなってしまう。しかし、明自身の心にはしっかりと宿り、広く大きく見ることから思考を始める態度を終生持ち続けた。父の願い通りの人生を過した人になったと思う。

父は宇宙の話が好きだった。ハレー彗星が 1910 年に地球に大接近した時、父は 21 歳、その彗星の尾は全空にも広がるほどだったと言うから、さぞかし大きな出来事だったに違いない。とりわけ知識人の間で興味と関心が向けられた。さらに、明が生まれる 2 年前の話だが、1924 年、火星が地球に大接近し、世界の天文学者が火星観察に興味を抱かせるような話題を提供した。ミラノの天文台長、スキヤパレツリが火星には運河があり、高度な生物の存在を予想したり、当時としては、H.G.ウエルスが「火星人襲来」を出版したりして、いやが上にも人々の目は地球の外に向けられるようになったのである。自分の目で火星を見たい、父は母に相談もせず天体望遠鏡を買い込んだ。思いもよらぬ高額な支出、相談もせず購入したことに抗議、母は毎日の切り詰められた実態から大変な夫婦喧嘩をやったという。

どこの夫婦の間でも起こりそうな事件だが、父が自分の強い願望と、息子達にも宇宙に関心を向けさせたい、という思いに対し現実の生活苦に悩む母とは大きな隔たりがあった。アメリカ企業の父の収入は出来高払いでボーナスは無く、母はその不安定な収入に苦しんだ、姉たちの夫はそれぞれ皆、大学出身で、その時代では比較的、高い身分であったのも辛い理由だったようだ。その背景には父が完全に一人で生きて来て全て自分で決めて来た、どこまで相手に合わせなければならないのか、父の戸惑いもあったのだろう。私には宇宙の話と望遠鏡事件の話、そして明の名前の話については、父の育ち、世界観そして、人柄のようなものまで一体となり、不思議な何かが伝わってくるような気がする。

3-4 千尋（四男）：父は空を見上げ、宇宙を思った。もう一つは海だったのだろう、故郷の村上では2km 歩けば荒波の瀬波海岸に出る。自然への畏敬の念は深く、若いときに上海に行ったことも大きな経験だった、海は広い、海にかかわる言葉を探した。明の名前で可成り母との議論で疲れたかもしれない。それにしても生まれてくる子は3人とも男の子、母も子ども、女の子が欲しかっただろう。海は女性名詞、父のころにあったのは「かみのめぐみはいとふかし（旧賛美歌457）」であり、1910年制定の尋常小学校唱歌「百尋千尋海の底」である。母も納得の名前だったと聞く。そして願いを込めて私のベビー服は全てピンク色で作ったそうである。当時のモノクロ写真ではわからないが、外に出ると「お嬢さんですか」といわれたそうだ。

4 明が生まれてからの綴り方：



父は1925年、日本市場にも登場した六桜社(小西六)のベストカメラを購入した。この写真には将来に少年期(おそらく、1930年、千尋が誕生したころ)に入った明がいる。目は一生懸命父親を見つめ輝いている。真一文字に口をとじ緊張している中に愛くるしいほほえみが宿る。写真の角度は真っ正面、手が隠れていて上段の書籍を多く見せようとしている父の思いも伝わる。父は無類の本好き、明も晩年父の蔵書の5倍は持っていただろう

母は明を出産後、暫くして肺逡巡と診断され、入院騒ぎとなる。半年ほどの期間だったが明はそろそろ物心つき、母が居ないことで、突然、泣き叫んだり、あばれたりしたそうだ。茶飲み話に母が語ったことだ。明の物心がつく頃、両親は最も経済的に切迫した生活だった。そもそも日本が權益を拡張し、前線に独立部隊の関東軍を配備、戦闘行為を正当化、次第に暴走部隊に変身、ついに1929年には満州事変が起きた。一方、脆弱な資本主義の構造、アメリカ的競争社会は、その仕組み故の世界大恐慌を引き起こし、世界中に大波が打ち寄せた。生活はもろに父親の仕事にも影響し、大きく収入は低下した。父の仕事は売れ行きがパツタリ、とかく、あまりしっかり貯金をする生活態度ではなかったので社会的な経済状況をもろに受けてしまう。毎日の生活の中に母親の必死感が明の心を打っただろう。明がなかなかしゃべらなかつたということもそんな状態が反映していたのかもしれない。自分が「兄」になった、という喜びと、それまでの末っ子の甘えが通じなくなる事への不安、そして、両親のひそひそ話

から漠然とした日常の中に広がる切迫感「自分は我慢しなければならない」という思いを



明、小学校1年、私は2歳、幼いころから明に見守られている感じだった。どうやら手に砂を握ってこぼしている、ただ、ただそれを見ている。微妙な時空の流れを感じる。二人の手の形がひどく似ているのが印象的だ。げんこつは元のところで60度位しか曲がらないのである。似ていると言えば、他につむじの数が三つで位置もおなじである。母に言わせると明も千尋は幼いときはとても利発に思えたが千尋は赤痢になって高熱を出してから普通になった、だった。

に認める強烈な Mother's Complex になる芽がでたのだろう。

ともかく先ほど述べた理由で経済的な不安定さを乗り越えるため母は保母の資格を取って働くことを決意した。父が探してきた玉成保母養成所にこの歳（35才）から勉強を始めたのである。丁度、シンが我が家を守ってくれる、という条件もこの考えを進める良い条件になった。

母が家庭と勉学を両立させるため玉姓の所在地、西荻窪に引っ越した。養成所のカリキュラムは極めて厳しく、毎日、7時、8時の帰宅が普通だった。しかし、総合的には母はもともと一歌が好き、ピアノも弾ける、絵も上手、子供を育てた経験もある、ということで良い成績をとり、養成所の経営者、アルイン先生に認められた。玉姓保母養成所の幹部になるという話が起きて、米国へ留学、研鑽を積んでもらう、という事になる。ビザまで取った矢先、周囲のある人から「田村は玉姓を乗っ取ろうとしている」という噂をたてられ、それをまともに受けたアルイン先生は母を玉姓養成所から追放、二度と玉姓には行けなくなってしまったのである。



小学校6年生、自己評価では上の下、府立一中をうけて無事突破、学校の成績はその時の単純な記憶力、入学試験問題は総合力、そういう感覚を小さい頃から身につけていた。

日増しに高めていったと推察できる。欲しかった自転車も買い与えられず、こわれた兄達の自転車を怨めしく見ていた。

社会情勢の不安定さは勿論多くの人々に襲いかかった。父の姉は婿養子を取り、村上で大工を次いでいた。その娘、シンは耳が不自由だった。ある工場に勤めたが世の中の不況で働き場を失った。彼女は叔父さんの田村幸太郎を頼って、上京、最終的に我が家でお手伝いさんの形で生活を共にすることになる。そんな中、千尋は誕生（1930年）した。明は母が生まれたばかりの弟を抱え、人力車に乗って帰宅してきた。その時の事は覚えている、と言っていた。子供心に様々な感情が駆け巡っただろう。兄になったことの一種の喜び、とはいえ母の目は完全に弟に向けられていることを感じ取ったのだろうか。後に自他とも

小学校時代の明は私には見えない。学校が違うのでその行動もわからないままだった。しかし、佐藤さんと言う友達の家に来て行ってもらい、その頃は珍しい鉄筋コンクリー建ての立

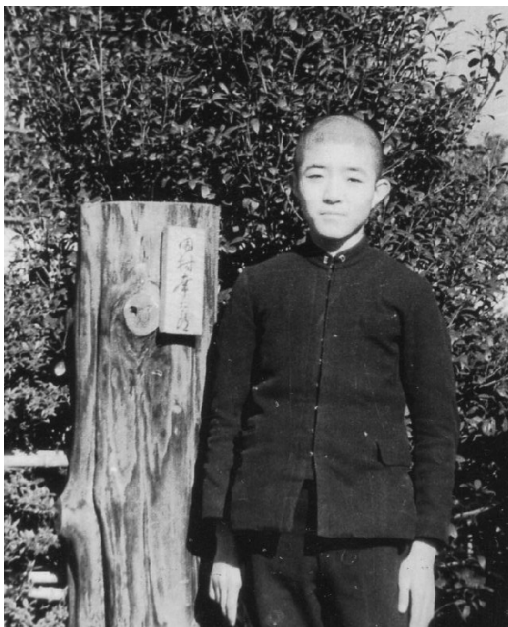


府立一中に入学した。両親にとって最大の喜びだった。1年生の夏副の装い、祝い事では「すき焼き料理」が定番で味付けは父の役割だった。まだあどけなさを見せる明帽子を深くかぶる傾向があった。

派な家に案内された。バナナをご馳走になり、これが私にとって生まれて初めてのバナナ、美味しいの限りと思ったのである。明に「ママに言うなよ」と言われていたのについて、母からの問いかけについて喋ってしまい明がひどくしかられてしまったのである。あの時代、我が家ではバナナは御法度だった。それは、いとこの二人もがバナナで疫痢になり、亡くなっていたからであった。それにしてもこの事件は生涯私の心に残った。しっかり約束したわけではないが「人との大事な秘密は黙っていなければならない」ということを。

その佐藤さん、担任の先生に可愛がられ、成績も良かったが府立一中（現、日比谷高校）を受けたて落ちてしまった。所が、明はその一中を受けて合格、先生に「君は運が良いんだな」と言われて多少、心に傷がついた、と述懐している。

ともかく、一中に入った、将来への期待が高くなった、こうして明は両親へ最大のプレゼントを送ったことになる。この祝い事にすき焼き料理が振る舞われた。何時もすき焼きは父が味付けをした。



明が中学3年と推察される。父が撮った写真で「田村幸太郎」の表札が気になる。府立一中（旧制）は当時、エリート校、学生服は海軍の軍服になぞらえてフック式、カッコ良い。歴史、地理が好きで幅の広い巻紙に有名人の家系図を写し取り、日本史と西洋史を重ねた世界史的な物の見方などをしていった。当時、まだ世界史という表現の教育史観はなかった。

中国への戦線拡大は泥沼化するなかで若者達は兵役年齢に達すると戦線へ送り出されることになる。死から逃れるためには職業軍人の道、例えば幼年学校や海兵に入り、早く将官になって采配を振るい威張り散らすか、理系の道に行つて技術畑を極め、技術将校になって身を守るかである。

中学三年生になったとき、明は肺逡巡で休学を余儀なくさせられた。母は非常に心配し、信州の保養施設につれて行ったり、特別の食事が与えられたり、別室で一人のベッドが与えられたりした。私には何も言われていなかったので大変に戸惑った。明はこの時から母を独占する。そうしてこの年の12月8日、遂に第二次世界大戦が勃発。

明は幸い、病は悪化せず、1年間の休学ですんだ。この休暇で人生の何たるかを考えたのだろう。大人になるまさに寸前だ。勉強も急に成績が上がり、希望する旧制高校に行ける程の成績になったという。そして4学年の時、飛び級で静岡高校の甲類（理工



旧制静岡高校の1年生の明、しっかりこちらを見ている秀才ぶら、という感じだがどうだろう。中学時代の帽子に2本の白い線を入れ、桜のマークに高と記された記章をつけていた。1年間の授業を受けた後、工場へ勤労働員、いすず自動車で働いた。その間、柿の木坂の自宅から通勤という形をとる。敗戦の8月15日は自宅にいた。その日から防空官制と称する黒幕で電気の光を遮光する必要が無くなった、なんだかとても。そして、警戒警報や空襲警報のサイレンはなくなった。

系)に入学した。この時、成績からどこでも行けるといふ事だったが一高では家から通うことになり近すぎてつまらない。ほどほどに家に帰れる距離として静岡を選択、コースは応用化学あるいは薬学としていた、それは技術将校への道を考えてのことだった。旧制高校の所謂、バンカラ雰囲気はチョット明には似合わないところもあつたが玄関先で拳を振って大声をあげ、高下駄を履いて仰秀寮の寮歌、「阿倍の川瀬をかなづれば」を歌った。歌は戦争への抵抗詩のようにも聞こえた。

戦争は最初の数ヶ月は景気のいい話ばかりだった。敵

の艦隊をことごとく撃沈させ、もはや敵なしのような大本営発表だった。ところが半年後、ミッドウエイ沖の開戦で日本の空母はことごとく大破、戦況は一遍に逆転した。ここからは転がるように敗戦への道を進むことになる。大本営の発表は虚偽と欺瞞に満ちた発表ばかり、硫黄島、沖縄が陥落し、それでも「竹槍を持って最後の一人になるまで御国のために闘うべし」と軍人は檄を飛ば

した。

明は10月になると嬉々として静岡に戻って行った。思えば彼の教育期間は完全な軍国時代、お国の為死にのみ強要され、成人になる寸前の19歳の時、まともな価値観を語っても良い時代になったのだった。それまで君臨していた教育者達は殆ど誰も今までの教育の誤りを懺悔する者はなく、ひたすら懺悔するのは自らの非力故に敗戦国になった、天皇に申し訳ないと言う人ばかりだった。

明が戦争後に寮生活をどのように過ごしたか、彼自身が語る「東京っ子の原風景」に詳しい。そもそも寮に入れてくれと頼んでも昔威張っていた教授が寮を采配していて学生の入寮者を勝手に決めていて、直ぐには入寮させてくれなかった。自主性などという言葉はそれまで完全に死語に近かった、戦後直ぐの状況故に寮の運営自体、やり方が分からない、バタバタしている風景が想像できる。数ヶ月後、やっと入寮する状態になり、それからの半年間は初めて「自治」と言う言葉が使える楽しい寮生活を過ごした。四つの寮の対抗試合で演劇をやろうという企画が起こり、明は演出を担当した。街の人たちを呼んで点数をつけてもらった所、評判よく優勝、初めて胴上げをしてもらったと嬉しそうに書いている。演出家などの道に自らの才能を感じ、東京に帰っても母と観劇をしたりした。そんな世界に行くのもありか、と考えていたようで隠れた才能を発見してひょっとすると演出家になっていたかもしれない、明が演出家か、なんて考えてみるだけで面白い。それにしても戦後の大混乱、食糧不足、といった明日のことが分からない時間を超え、このように自ら文化を創り出し、人にそれを示した人々に私は感嘆する。私は家において、ひたすら空腹を



東京大学に入学、1学年の春、建築学科の入学記念集合写真からとった。この頃は写真は大変贅沢な楽しみの一つ、まだ、フィルムもコダック社のものが出回るだけだった。明は戦争が終わってから髪を伸ばし始め随分長くなったが大学に入りバサリきってしまった。長髪の写真は見あたらないのが残念だ。

耐えていた記憶があるからだ。

そんな横道にそれた時間を過ごしながらも結局、東京大学を受けることになる。今更文系を受験する資格もないわけで工学部を受けることに、そもそも、こんな調子だから自分の進むべき道をしっかり持っていたわけではなく、彼自身は迷いに迷って歩んでいた。理系的な頭の組み立て方の人だったが計画性のある人ではなかった。自然科学も原理追求的なものより応用的なものに向いていた。工学部の中で最終的に選択した建築学科は幅広い総合的な知識に繋がる、という意味でぴったりとマッチする。さらに、選んでみれば田村の祖父は大工だった、父の顔も浮かび、何かホッとするものがある。

大学時代の生活は戦後のまさに「平和」を享受するものになっていく。一学年の末、建築史の藤島玄次郎教授に引率されて京都、奈良を見学した。この時に学んだ「文化とは何か」とい

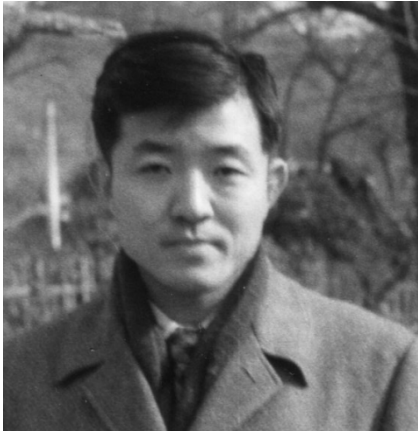
うテーマ、そして実体に触れて深く考えることの楽しさを学んだではないかと思う。広く世界を見る、時を考える、人を考える、生きるを考える、ということだった、さらに如何に楽しい作業であるかを確信した。関西圏にある文化の深さみたいなものにある種のがれを持ったともいえる。これが引き金で明は学生時代はアルバイトをしてはお金を貯め、鉄道の学割で日本中の小旅行を楽しんでいた。宿泊代は出ないから良く駅で寝たと話していたが、母は風邪を引かないようにと心配をしていた事を覚えている。最後には母親をつれて十和田湖旅行をしていた。この時は立派な旅館に連れて行ったという、残念ながらこの頃の記録写真はない。

いよいよ卒業を迎え、自分の方向性を決めなければならない。明は建築構造体に心を砕



ピアノは弾きたかったが千尋にとられてしまった。それでもベートーベン、月光の第一楽章はひけるようになった。学生であり、運輸省に勤める頃の明。

く、という設計屋さんには成りたくなかった。卒業研究のタイトルは「大都市地域構造の変動に関する研究」だった。この卒業論文には千尋も援軍で参加。日比谷図書館で私鉄の各駅の駅利用者数の調査をまかされた。当時、既に東京が人口急増が始まっていた。明、自身は地域ごとの変動要因を調べ、人の動きと変動要因との関係を見る、といったような研究だったと記憶する。このことは彼が既に構造物よりは「人が住むまち」に目が向いていたと理解する。運輸省に入省しても大学法学部にも通う二重生活をあえて遂行したのも驚きだが、この経験は官僚の仕組みを観察する時間だったと考えてもよいだろう。大きな意味で社会の



自分の思いの中から選択した大阪勤務が始まり快適なそして余裕のある毎日が待っていた。関西文化圏の広がり、厚み、歴史的な建造物への数々、知識の収集は楽しい。ここに来て明の目の表情が何となく和らぎ、口元も優しい。日本生命の塚口寮に何度か遊びに行ったが、朝 9 時から夕方 4 時まで昼は 1 時間休みで土曜は半ドン、大学を出てここでの仕事は不動産関係、既に知識の上では指導的立場だったという。生命保険会社のそれまでに新しい分野を開拓させ長という会社の方針に乗ったもの者だった。

次第に遠くに去っていく、余裕のある時間を過ごしたことになる。関西文化あるいは歴史やお寺の数々に研究的な態度で訪れている。千尋も 1957 年から 1 年間大阪大学に留学することになり、何かと交流する時間が持てた。

記録として残るものに黒崎幸吉の聖書研究会の一員に YA さんという女性がおられ 100 通ほどのラブレターが残されている。非常に清純かつ熱烈な文面を発見して私はとても嬉しく、ホッとした思いもある。明は人並みだったのだ、と。それまで自らの女性関係を兄弟には見せなかった。このレターをみてそういえば柿の木坂の家にも冬休みなどにこの女性から手紙が届いていたことがあった様な記憶がよみがえる。だが、ともかく、明はこれは最後までおもてに出さなかった。私には 3 人の兄たち、それぞれの青春が私にも見えた。こういった明の大阪ライフは表面的に豊かで安寧の自己中心的な人生で自然に出来ていったのだと思う。しかし、自らの趣味趣向を切磋琢磨するだけでは満足できないとも感じ始めていた。「人生の意味」を考えてこのままの毎日の生活で良いのだろうか、自問自答。

明は母親に自分の人生設計を語り、このままでは安易なダラダラ人生になりかねない。もっと自分を試すような仕事を見つけないかと訴えた。恐らく全く動機も内容も違うが母の思いの中に自分が幼稚園の先生を目指した時と年齢的にも符合すると感じた。明の話にまず一番ピンときたのは伴侶が必要なのだ、と思ったのだろう。矢内原集會に何時も出席している斎藤眞生子に白羽の矢を立て周辺の友人達に相談を始めた。具体的なプロセスはわからないが結論として母のこの計画に明は素直に承諾した。恐らく YA のことは口に出さなかったのであろう。そうして 1960 年結婚した。またとないペアの誕生、結婚だったが早いうちに子供が授からない、という現実と直面、新たな困惑を加えていく。この子供が

仕組みと人の流れを最初のテーマにしていた、とも考えられる。

こうして幼い頃から好きだった鉄道、地歴の知識が研ぎ澄まされていった。各地の文化に触れ、行く先々で見る文化の違いに興味と関心がさらに膨らんでいった。それまで東京だけで過ごしてきた、とりわけ文化の違いに興味を持ったのは藤島教授から学んだ事がきっかけで関西圏の人の生活パターンや価値観の違いに目が向いた。こうして明の 2 回目の就職先は関西文化圏という条件、

民間の大きな会社の仕組み、さらに自由な生活を求めて日本生命相互保険会社に就職、かくしてそこに安定し過ぎると思われる日々、単純でわかりやすい仕事にあけくれる毎日が待っていた。日本生命では文化活動に可成りの時間をさき、雑誌などの発行、聖書講読会、合唱部活動などを行っている。日曜日には黒崎幸吉の聖書研究会に参加し、祈りの時間を持った。ここでは暫し、戦後は



1963年、環境開発センターでの仕事ぶりは猛烈だったという。しかし、口元はゆるんでいる。仕事はきついが心は開かれていたのだろうか、新しい仕事場では可成り厳しい一面を見せたという

与えられない、という事実を明は「自分の思うように自分の道を進め」というメッセージと受け止めた。大会社で悠々閑々と過ごすことよりは自分が人のためになった、と言われるような道を探せ、そう考えての丹下研を訪ねる。既に隠然たる実力を内外に示していた丹下健三は明に大学助手への道を示唆したという。しかし、たまたま訪れていた浅田孝^{注1}から、「野にあって仕事をする方が田村らしい」といわれ、1963年、彼の率いる「環境開発センター」に引きづり込まれるように入社することになっていく。これが明の人生、最大の転機となった。

という価値観を投げ始めていた。その先駆けだった浅田孝の理念に明も共鳴した。「環境、Environment」には「まちづくり」の深意がこめられ、後の発想の原点に置かれていたように思う。こうして明は仕組まれたように環境開発センターが横浜市から受託した「6大



1989年、法政大学教授としての生活が身について自分のやりたいことをやれる充実した生活を過ごした。その最もやりたいことの一つは世界旅行、世界134カ国を旅してスケッチをし、写真を撮った。

社会を見れば強烈な高度成長が続き、それに引きずられて起きてきた歪みの問題が新聞を賑わしていた。時代の要請はもはやがむしゃらに生産を拡大させることではない、生活環境を先行させるべきだ、

「6大事業」を手掛けることになったのである。飛鳥田一雄と兄、義也はすでに雑誌「世界」で親しい間柄になっていたことも大きな信頼関係が既に構築されていたと理解する。明はこうして時代に合わせた法の解釈、施行を進め、近接する他の自治体との関係も含めて考え計画を推進した。横浜市に入庁したときは恐らく飛鳥田市長以外は殆ど面識はなく、自分の立ち位置を含めてまずは提示と推進の両面を出すことや担当部門へのアプローチなど、全てが重たい人間関係に基づく展開を必要とした。初期の頃に果たしたと言われる「大テーブル主義」は若手のやる気を起こさせる最良の手法だったと思う*。また、特徴のある人材発掘や雇用は後の全体テーマの推進に有効だったように思われる。もう一つは与えられたテーマに対して初めから理想像を描いて突進するのではなく、テーマのなかに可能な限りの正負の

要因を探り出し、鍵を握る重要なポイントを探り当て、解決法を探索し、手順を組み立てて適合する人物を担当者として配置した。メモ書きの中にそれが見て取れる。さらに、一



1997年、法政大学も退官、自由のみになり私塾、「横浜まちづくり塾」、東京には「現代まちづくり塾」を始める。市民と言う言葉を大事にして「ひとづくり」も一つの大事な要素として見直す。市民政府論を展開する。

ブクブクに太ってしまった。ある日、明が疲れて家で寝転がっている姿を見て「ああ、辞めて良かった」強くそう思った。法政大学では学生達に語りかけるような教育の道に入っ

つのテーマのなかで凝集されるような重要な判断が出来て、それが普遍性の高いものとして見えたとき、そこを柱にして考える、時間の経過に従い座標軸の移行まで構築していった。一種の合理性の連鎖の中に彼なりの理想像を描いていったと思う。それらが結果として、ある種の一貫性と人に対し映る様になったのだと思う。

横浜市を退任する迄の時間経緯は再び明の悩みの日々だった。技官になることは名誉役みたいなものだ。この上司は自分を使おうとはしないことが明確にわかり、多少後ろ髪を引かれるように横浜市に別れを告げた。しかし、私から見て横浜市での一連の仕事は素晴らしいと思うが、かれに送迎の車を与えられて歩かなくなり、ひたすら美食を口にする様になって



たが、後、人とは何か、と言う問題意識を持っていく。世界134カ国を旅して沢山の人々に触れた。人間と地球というテーマは想像を超える大きさがある。宇宙太というテーマは父、幸太郎の思いであり、明の最終テーマになったのだ。

2007年、多くのことは自分の思考の結果である、力で身につけてきた。ある意味では場の哲学をしっかりと実践的に実行してきたのではないだろうか。「忘れたものは必要ないんだ、それでいいんだ」が持論だった。環境開発センターに仕事を始めた頃から笑みが多くなる。写真の撮り方が変わったのもあろうが心の中に希望がわいてくることだろう。日本生命と一緒に仲間を作った一人から「有名になった田村明さんより昔の田村明さんの方が好きだ」と言われたときはハッとした。人は時間と共に何かを置いてきぼりにする。時々昔楽しく話が出来た人を思い出して語りかける機会を作るべきなのだろう。

5、明に最も影響を与えた兄、義也：

明は「義也の履歴書」というタイトルで義也が中学校までのことを一遍に纏めている。勿論、「東京っこの原風景」でも触れているが、履歴書といっても思い出の要素が大きいし、彼の死を通して感謝や自分の気持ちの整理に役立つ語りだったとも思える。

義也の性格は一言で言えばユニークであり、実に一貫性のある生涯を送った。しかし、人生の大変曲点は社会生活の最初に始まったことだ。明の所でも述べたように社会全体が戦争を願望しているような雰囲気になってしまった時が小学1年生、「義也の履歴書」にあるように皇国史観の強い沼田訓導の影響をもろに受け何処か回避しながらも学徒出陣では錯乱するような出陣式になる。結局、日本刀を持った軍人さんになってしまう。幹部候補生になる意志を母に伝えていたのは彼がいた横須賀の重砲兵隊の接見所、私も同席した。その時、母の目が涙に潤んでいたのを忘れられない。烈しく厳しいが幹部候補生には多少の自由が与えられ思いの程を記録、義也はそれを戦後改めて清書した。久美子によれば義

- 5/10 (以下日付け、欠落)
- 今日は少し興奮してゐるのかもしれない。神経のたかぶりといふものは、入隊前は毎日の様にあつた。慷慨、そういつた若いものの憤りである。だがそれが失われた、なくなつてゐたのではないかと思ふ。
- 軍人に対し…そして以前持つてゐた様な感情で自己(？)批判する様になつたのではない乎？
- 私の嫌悪するもの、さういつたものには？
- やはり老いる、年をとるといふことは人をだんだん落着きをもたせてゆくものであるうか。私は年をとつたのか。
- 缺けてゐる点それを何によつて覆ふか。より大きな長所をもつて。
- 日本人の死、いつになつても亀井勝一郎の若い、いのかあふれるやうな文章をよむと(それがたゞ文字の羅列ではないことだ、生きてゐる、呼吸してゐる)新しい感激と刺激。純粹に対する情熱、それがよびさまされる。
- 「余は如何にして基督信徒となりしか」早くよみたい。
- 一切の不純なもの、妥協そして策略的な、為にするすべのものを排して嫌悪して、そして生きてゆく。清く、美しく、それなくてはならないし、そうである筈なのだ。
- 而してこういつたものは常に眼前にある。ためにするすべのことが…そして、世の中は動く。自分は一体…而して…わしも知らない。
- 僅かでも虚栄心、つまらないヘロイズム、それがあれば笑はうとする、排する…矛盾如何にもならぬ、人間の本性本能を…あまりに心理を追求する故に意識過剰。
- 略
- 6/5
- 香櫛園地区も空襲さる。八中隊焼く、四中隊は安全なり運命のみ
- 頭の芯に熱があつて目はさえてゐた。灰色の厚い壁が目の前に立ちふさがつてゐるのが感じられる。
- 大気は悪い酒のやうにどんよりと頭におもかつた。

1945年5月10日より6月11日までの記録、文章は極端に抽象化されている。恐らく、検閲されたときの用意だろう。むしろ書く事によって批判すると言うよりは自分を納得させているような文意が伝わる。亀井勝一郎の文に生きてゐる、呼吸している、の深意は軍隊生活を「純粹」という精神的な回避行動か。最後の意識過剰もその裏返しか、中間は省略、空襲をうけ焼かれて「運命のみ」は重い。母親が「お守り」と記した袋を作つて中に新約聖書をしのばせた。隠れキリスタンを想起させるが、中のこの文面にヤコブ書の数節が入っている。その後、お守りは検察にあい、没収されたと聞いた。6月11日に休みがあり、兵頭家を訪問後、一時の帰省をしたとある。その2ヶ月後敗戦の日を迎えた。

也が兵役中、仲間が出来て「資本論」マルクス・エンゲルスを読んだという。

西宮にあった陸軍の船舶兵部隊に入って8月15日を迎えた。幸い、潜行艇が生産できず死をまぬがれた形になった。軍人になり将官を目指した彼が敗戦の後の自分の立ち位置を見失う、行くべき道が突然消えてしまった。義也が素直に自分の敗戦将校の立場を文章にしているのに接して戦争に出かけていった人のある種の壮絶感を見た。敗戦とは何か、そこまで行った人は少なくともそれまでの自己の否定から始めなければならなかった。

食料の逼迫状況を超えて日本全体が何をどうしたらよいか分からないという時間が過ぎていった。終戦尉官の恩給が勉学のための資金になり義也は慶応大学に復学した。帰還した義也の整理はどこから始めたのだろう。もう一度、資本論を読み直し、千尋を生徒にして何回か話を聞いたことがある。部屋はごちゃごちゃした所だったがその書籍類は大塚久夫や丸山真男など、それまでの体制批判に最も冷静な立場で学問をしていた常識人の立場に回帰していった。こうして勉学とアルバイトの毎日を過ごし大学を卒業する。就職は

中学三年の時、家庭新聞を発売刊、戦時体制に向かう日本の立場を踏襲した編集方針だった。残念ながら両親の心の声は聞かれない。知らないままに沼田訓導の言うとおりの軍国少年になっていたのである。召集令状がおりるまで家庭新聞は継続、そうして帰還の第一声がこれである。いみじくも義也が小1の時からなにかと皇国思想のバクテリアにサラされ、そのまま軍人になる道に入ってしまったとみえる。敗戦の事実から改めてこの後どのような変遷をたどるか、時間の経緯をたどって、もの見方が次第に変わり生涯の仕事は本作りの道に進んでいた。

俺は還ってきた。難という感慨であろう。」そして刀をつけて歩けない敗戦の現実、入隊以来あの日の丸に贈られて征でてより一年八ヶ月の歳月が流れた。あらゆるものゝ影響から小さな殻を防壁に抗戦してゐた俺も、遂に殻を破ってその中に飛び込むようになった。入隊前の俺と今の俺、確かに甚だしい相違があるに相違ない。俺の感性と知性は再び昔日のそれではない。脱皮、そんな生やさしい言葉でなく俺は溶鉱炉の中に投げ込まれたのだ。しかし俺のみならず、全ての日本国民がそうであろう。この数年の戦ひ戦争は人間を斯く迄変えたのだ。そして敗戦は今迄の己の信念を根柢から覆した。日本の使命、優秀民族、国家主義、民族主義等々何たる歴史的現実であろう。そしてともすれば虚無（ニヒル）に向かつて急転直下してゆかんとする己の気持ちは何としよう。希望のない混乱の真真ん中に突っ込まれた我らだ。少なくとも俺は未だ立ちあがれそうにもない。だが思索し、且つ感じたことを手を動かす事によって文字を為しゆくとき、俺には慰安が生ずる。それが作られたものが作るものへ何らかの方向を与えて呉れば幸いと思ひ、この新聞を五〇〇号から発足せしめる事とした。

丑村義也

三菱電機に内定した。追って岩波書店を受け、ここも採用の通知をもらった。どちらかに決めねばならぬ。民需に切り替えたとはいえ三菱は軍需産業の中核を走っていた会社、大会社の組織の中は軍隊で訓練されたあの姿、岩波は教養と文化の担い手だ。義也の選択は岩波だった。父親は非常に喜んだ。この選択がその後の義也を本来父や母が願っていた道に進む第一歩になったのだから。義也の軍刀は屋根裏の奥の方にしまい隠された。

岩波書店での駆け出しから8年目の1956年、岩波新書の担当になる。最も編集者らしい仕事は二年目、坂口謹一郎(農芸化学者、1967文化勲章受賞)の「世界の酒」を纏める仕事だった。元は国税局の雑誌、「財政」に連載されたものがあつた。お家を訪れると先生から「私は研究者だ、紀行文のようなものは書くべきでない、時間もない」と断られた。それでも何度も何度も訪問し、最後に「それならあなたがやりたいようにやりなさい」と言って研究室に行ってしまった、という扱いから始まる。実質、先生の意向に沿うような形で最終的にはあの本になったのだが、坂口謹一郎を研究者から文化人に引きずり込んだのは義也だったかもしれない。後に雑誌「世界」に移ってから親交が続き、二編の酷のあるエピソードが起草頂いたという。「君知るや銘酒泡盛」の一節も泡盛を飲みながらの先生との合作のような意味合いのことが記されている。そんな間柄になり、義也曰く、理系の先生は実験から離れられない、定年で実験室が亡くなったときの坂口さんは落ち込んで可哀想だったと語る。私が化学の研究者であることを知っての意見だったのだろう。本にもそれを記している。義也は生涯をジャーナリスティックな大局観で岩波書店の編集の仕事を生

う出来たことは素晴らしいことだった。岩波新書の青版を担当し、1956～1971年まで編集、出版をしている。その間、43冊の新書を世に送った。多くの文化人との交流が出来たことが最大の財産になったのは言うまでもない。義也は雑誌「世界」の編集長をやった時の二つの大事件、三島事件と大内兵衛の東大全共闘事件が並ぶ、前者は岩波書店としては三島事件を無視、後者は1969年3月号の雑誌「世界」は廃刊とした。二度とも懐に退職届をもって事に当たった、正義感と責任感はその真骨頂である。

私が米国留学から帰国したばかりの1967年は色々と大きな変曲点のある年になった。明は横浜市への移籍が打診され、ほぼ受諾を決心。義也は雑誌「世界」編集部に移り、今までよりタイムリーに政治や社会問題に目を向けていかなければならなくなった。充実した仕事、多忙な毎日、さらに突然のように最大の祝儀、大島久美子との結婚が約束された。そして5月5日結婚式を迎えた。既に父は世を去っていたが母は健在、且つ、久美子はあえて田村家の母の行動力に共感を覚え、約一年間、母と同居して田村家流を身につけた。下の弟、二人からは母、忠子の最大の理解お嫁さん、という位置づけである。義也がこの結婚で得たものは非常に大きい。全体に人に対して寛容になり、柔らかくなる。それまで見せたいいわゆる「つむじまがり」乃至、ストイックと言う風情はみるみる消えて円満になっていったからである。

田村家では父がなくなってから母を囲んで毎月一回、聖書を読み、解説をする会を持つ

一冊の書物を企画して、著者に依頼する。さまざまな経緯があり、ようやく原稿が完成する……。こんどは、その内容にふさわしい「意匠」を着せること、つまり「装丁・造本」が終着点としての仕事になってくる。

モノを書き、著作を活性化して世に問うということは、骨身を削るようなきびしい作業だ。ある種の錯乱におちいったとしても不思議はないほど、それは極度の集中力を必要とする。その全過程にかかわってというか、ある距離をおいて介在して、全体を按配するのが編集者の仕事である。もとより編集者は表に出るべきではないから、いわゆる「黒衣(くろこ)」のごとく、「縁の下(えんげ)の力持ち」として、立ち回る。したがって、注意深い編集者がいないと、完璧な本はなかなか生まれない、といってもいい。

云々

「本づくり」というものは、編集企画←原稿入手←校正点検←造本装丁という時間経過をたどる。だから、出版を編集と営業とに大別すれば、本のカタチをつくりあげて、営業に商品として渡すまでは、すべて「広義の編集」といつてよいと思う。現実には、編集・校正・制作の「一貫」体制とか、「分業」体制とか、それぞれの出版社は、独自のやり方をしていて、いづれにせよ、各部署相互間の経験交流は必要だし、編集者は、その全体を通しての総合学(?)を身につけていく……。ほんらい書物の内容は精神の産物であるから、もちろんカタチはない。だから、何百人の人が回し読みしようとも、書物が減ったりすることはない。他の商品とは異なる所以(ゆえん)である。このカタチなきものを媒介する文字―その文字の書体を選び、組み方を工夫し、また、装丁・造本によって、最終のカタチあるものに仕立てあげる。……その不安と緊張と安堵が交錯するところが、案外、編集者の仕事の魅力なのかもしれない。

云々

さて、その書名を描くのは、私の装丁のなかでいちばん重要な仕事である。それにほ、とくに集中力が必要なので、家人が寝静まった真夜中にやるのだが、いつも気になるのは「の」の字のことである。啄木の「東海の磯の白砂に……」のようなの……の連続はよく引用されるが、「この時代の中の……」「私のなかの……」「日本の……」等々、日本語の構造からくるのだらうが、「の」の字のつく書名はかなりの多い。この平仮名は、一筆描きの曲線なのだが、ちよつとした筆使いで、たちまち千変万化の表情をみせて、面白い。活字や写真植字も、明治以来の書体の変化の歴史を担っており、それぞれ違った特徴があるから、ほとんどの場合、かなり手を加えて修整する……。

こうして「の」の字のある書名の本の装丁について書いているうちに、「の」の字がない本についてもとりあげましょう。それに、編集のこと、出版全体の事情をもっと書いてほしい」等の要望が出された。そうなっていると、長年、「書店」にあつて編集の仕事に携わってきたのだから、連想が連想を呼ぶ。かねがね編集者はみだりにモノを書くべきではない、守秘義務もあるし……と考えていたから、自戒しつつ筆を運んだつもりであるが、二年半で三十回の長い連載となつてしまった。次の続き連載を始めようという予告されたのだが、残念なことに突然雑誌が休刊になつてしまったので、この本でとりあげた装丁の仕事は比較的初期のものだけになつている。また、文章は、あえて手を加えず発表時のままとした。

云々

一九九五年十二月

た。その帰り道、かならず義也宅によって二次会をやるようになった。メンバーは義也、明、千尋の3夫婦である。そして公害問題、そして都市問題では明との意見交換や立場の違いがあり議論は白熱していた。弱者発生のメカニズムとそれを少しでも軽減すべき対策の話だったと思うが、明が「そういう風には簡単にはいかないんだ」という最終的の回答に遂に義也が「やっぱりそれが東京大学的発想の限界なんだな」、明は自分の全体のバランス感覚は良いと思っているので逃げたり、訂正したりしなかった、結果として話は続かなくなる。だが、義也が昔と変わったのは、ほんの1分もするとまた雑然とした自分の部屋からなにやら書類を持ち出してきて新しいテーマで話をするとした調子になっていた。

岩波が「現代都市政策叢書」を企画したのはその頃である。可成り具体的な社会問題に目を向けていた。後に義也への追悼文の中で『私が岩波の「都市政策叢書」の編集にかかわることになったとき、社内で「ネポティズムだ」と非難されたらしい。ただでさえシャイな兄がそんなことをするはずがない。私を推薦したのは全く関係ない学者だ。だから会議で顔をあわせても割と知らん顔をしていた』とある。実体はどこまで本当か分からないが義也が都市問題に目を向けていた大元には明との議論が役に立っていたのは真違いなであろう。岩波として考えたこの「都市政策叢書」の仕事上のことから義也と明はさらに話題が豊富になり親密さをくわえて行った。義也、明夫妻の海外旅行も何回も行われた。生前、義也、自らの著述は「のの字物語」一冊だけである。その一節をここに引用する。彼の金字塔は本に込められた愛情であろう。人が考えたことや思いを文字にし、労働者は活字を一つ一つ組んで印刷して仕上げる。その一体感まで伝えたかったのかもしれない。装丁屋になって改めて本作りの意味、著者の意志、深意を探りながら表紙を考える、それを見ただけで中を読みたくなる、そんな表現を心がけたという。どこか棟方志功を彷彿させるような作風だが、生涯で1400冊ほど、人様の本の装丁、本の顔を作り続けた。中でも内田百聞の66冊、本多勝一の63冊、安岡章太郎の36冊は圧倒的に多いが金石範、羽仁五郎、鶴見俊輔、大江健三郎、宮尾登美子、坂口謹一郎、鎌田慧、岡部伊都子、石牟礼道子など文化人の幅は広く、ご交際頂いたと理解する。この皆さま、何となく似た香りがする。

義也は私にとっては不思議な面白さを持つ大好きな兄だった。心情的には近い兄という

田村義也の思い出 田村 明

男ばかりの四人兄弟のうち、義也兄が二番目、私が三番目だ。四分の一世紀も身近に付き合ってきた。なかで大きな事件は二つだ。第一は岩波書店に入ったこと。第二は四三歳でよい伴侶を得て結婚したこと。戦後、三菱電機に決まった就職を止め、岩波書店に入った。一番喜んだのは、岩波刊行本の無類の愛読者だった父だ。三菱は優良企業だったが、こんな大企業では個性は発揮できなかったろう。本づくりの仕事が人生を決め、個性をよい方向に引き出す。装丁もその延長線上にある。内村鑑三の無教会の集会に出ていた父母の下に、批判精神をもち、筋を通し、虐げられているものへの思いを育てた。

私が岩波の「都市政策講座」の編集にかかわることになったとき、社内で「ネポティズムだ」と非難されたらしい。ただでさえシャイな兄がそんなことをするはずはない。私を推薦したのは兄とかかわりない学者だ。だから会議で顔をあわせても割と知らん顔をしていた。

岩波をやめて装丁家になってから、初めて装丁をやらせたのは、私の編著「文化行政とまちづくり」だ。共編者の森啓氏がどうしても田村義也に頼みたいということからだ。その後、私の書きおろしの本も装丁してもらった。私には厳しいが、編集者には「これは弟のだから」と言っていたようだ。著書、編書、訳書と合計七冊の装丁がある。もう何冊かして欲しかったのにと悔やまれる。

位置づけでもあった。感情豊かでありのまま、怒りを爆発させ、昔は怒ると直ぐ自分の部屋に引っ込んでしまった。気分が良いときの義也は楽しかった。一つのことを言うのに周辺からいろいろ話を織り交ぜ、組み立てて核心に進む、中心話題に入ったときは全貌がなんとなく立体的に見えて来るような話し方だった。シニカルな内因を交え人をニツとさせることも屢々であった。義也の二人の息子の結婚式でも式の終わりには父親の挨拶があるものだが、実に話題性と表現が巧みで何時からこんなに話がうまくなったんだろうと思った。二人の息子に対して適切な社会での対応と参加されている先輩や友人に対し、実にしゃれた挨拶をする。やはり日常つきあう文化人達に練られて会得した話し方なのだろうと納得したものである。最後に明が義也一年目の記念祭で残した一文を載せる。

6 長男、忠幸：

様々なゲームを工夫して明、千尋を相手にし、遊んでくれた。一つにキビガラ相撲がある。キビガラの底に画鋏を指し、重心を下げ、相撲に見立て、互いに交互にはじきあって土俵の外にはじき出すか、相手を倒すかを競うのである。当時、双葉山、羽黒山、玉錦、男女ノ川など、強かった関取には工夫してなるべく実績にあうように作っていた。しかし、なかなか思うようにはならず、これは4,5回でやめになった。また、野球ゲームを作って遊んだのも楽しかった、守備側と攻撃側に分かれ、二人でサイコロを2個ずつ同時に振ってその目数から投げた、打った、取った、あるいはボールが抜けた、を予め表を作って決めておき、ゲームを進める。世の中にゲームらしきものは何もない頃にそういう工夫をした遊びの先導をしてくれた。青山師範から麻布中学、青山学院商学部を経て、ニコンに入社した。その途端、赤紙の招集令状が届き、宮城にある近衛第一部隊に入隊、兵隊に本人にとってもだが、母親にとっても試練だった。会えるときは毎回、かならず面会に行った。入隊後数ヶ月して海外出兵になるが誠に幸運なことに戦火のないスマトラだった。敵の攻撃は一機の航空機がやってきてパラパラと銃を撃っただけだったという。戦争がおわり、帰国して私に会ったときの第一声は、「おう、千尋か、僕が一番小さくなっちゃったな」だった。その姿はまるまると太って食物には全く不自由していなかった事を物語っていた。日本とりわけ東京は戦後で最悪の食糧事情、野草や蛙を食べ、ララ物資と称する豚のえさ、脱脂大豆を食べていた。

性格は極めつきの教条主義と映る。これは義也とは真反対の性格で両親のどこの遺伝子がこの兄を作ったのかと思うほどカッチリしていた。収集壁が強く、切手や小銭をよく収集した。きれいなしっかりした文字を書き、事務的な処理能力は抜群に高かった。兵役から解放され帰国後、新聞広告で見つけた映画会社の大映に勤め、映画館にアメリカ映画の配給係をしていた。この兄は地方出張や時間外手当で経済的に潤っていた。株にも投資、戦後の高度成長期に思うように手腕を発揮した。30代で一戸建ての家を建て、大映が傾くと友人を頼って荏原製作所に転職、荏原インフィルコの設立に寄与、役員になって常に安定した生活を保った人である。金銭に対して強烈な執着があり、終生その感覚は継続し

ていた。恐らくそのようになったのには世界大恐慌で田村家の危急存亡時に小学校5年生、親の必死さ感覚が何かと子供心に留まり、プリンティングされたのではないかと思う。経済的に早く独立していたので最も手のかからない子でもあり、経済的には頼りになる長男だった。父、幸太郎の中学の親友の娘、中山敏子を迎えて表向きは順風満帆の生活に見えた。娘、麻美子の育児、教育に絡んで舅との間はギクシャクした。麻美子は祖母、忠子に可愛がられたことを良いことに養子縁組までしてもらい祖母の財産を手にした。この一件は兄弟同士の不信を決定的なものにし、対長男、残り3人が対立、残念ながらその後、修復のないまま、殆ど交流のない状態になってしまった。大きく見ると人生目標に違いが出て、下の弟たちと年を重ねるほどに距離が遠のいていった。一方、麻美子が母、忠子との橋渡しをする形で多くの田村家にあった資産を忠幸のモノにするに及んでこの次第が決定的になってしまった。最も、そのことによって祖父吉田亀太郎に関する資料を集め 930 ページになる大作、「吉田亀太郎追憶集」を自費出版出来たとも言える。

徳川幕府は、二五〇年余の長きにわたり諸藩への巧みな諸策、あるいは切支丹宗の伝播を恐れての鎖国政策をとって、一応天下太平の世が実現した。しかし、華やかな元禄時代を迎え繁栄は頂点に達したが、放漫財政による藩財政の悪化、享保、天明、天保の大飢饉、農民一揆、騒動が各地に起り、

幕府最後の將軍徳川慶喜によって大政奉還となり、明治維新が確立に向って進み一人六九年(明治二) 五月戊辰戦争が終結し維新は完結した。

このような時代背景のなかに、吉田亀太郎は一八五七年(安政五) 陸中国(現・岩手県)花巻に生れ、幼少時代をその地で過ごした。自叙「一伝道者の生涯」に、「慶応二年、三年私の七、八歳の頃は、徳川三百年の太平の政治に漸く痺が生じ始めて来た時の頃とて、日本全体の大、小名は上を下への騒ぎ、実に騒然たる物情であった。」と述べている。

宗教界に於ては、明治に改元されて一八六八年(明治元) 三月一四日五箇条の誓文が發布された翌日、五榜の掲示(高札)が掲げられ切支丹(キリスト教)への対策は、幕府の政策を継承して禁止が続き、信徒の逮捕、刑に服する者も出た。

斯うした世情のなか、吉田亀太郎は東北・石巻から上京した時は、十六歳であった。上京後、漢学を岡本監輔に学び、職にもついたが化学を学びたい心が沸き、縁あって化学試験所に職を得た。隣家は、宣教師カロソルスの家だった。ふとしたことで、書を読みイエス・キリストが人類のため十字架にかかり血を流されたことを知り、涙を流したと自叙「一伝道者の生涯」で述べている。ひたむきな感受性の豊かな青年であった。

亀太郎は、東北伝道の念いがかない仙台の地に押川先生とともに一八八〇年(明治一三)一〇月基督講義所を開設、一八八一年(明治一四) 五月一日仙台教会を創立し、本格的に伝道が開始されたのである。

当時の伝道は、耶蘇教(キリスト教) への罵声と迫害としてさまざまな障害が襲うなかで、イエスの福音を説き続けていった。かくして念願の東北伝道はその使命を果たし、一九一三年(大正二)一二月浦和へ転任して牧会を続け、一九二五年(大正一四)九月、専任牧師を隠退した。しかし、福音を説くこと止み難く自由伝道師として各所に福音を述べ伝えた。

略

吉田亀太郎追憶集：忠幸が精魂込めて活字と取り組んだ労作であり、大作である。彼の意志がもっとも詳細に記載された「まえがき」の一部を記載する。キリスト教排他思想の強い東北地方に祖父、吉田亀太郎が開拓伝道師として赴くのだが、冒頭に明治維新の背景を語りかけ、改めて、その時代を想起させ、大きな苦勞を覚悟して現地に向かったであろう事が予想させられる。忠幸はこの編集を思いついた理由を最後に纏めている。それは幾つかの偶然とも思えることが自分をこの仕事を「やるべきだ」の引き金と感じたという。そのことを、「神の意志」と捉えている表現である。最後に 1933 年に田村幸太郎が主体になり、吉田亀太郎追憶集を発刊したときに亀太郎が幸太郎に言い残したことは自らの「伝道者の生涯」には「無学の伝道者」とせよと言い残した。

7 父母の遺してくれたものの社会的背景を含めて

7-1 父より： 我が家には望遠鏡、顕微鏡があった。普通の家ではあまり見かけないものである。父の仕事、ナショナル金銭登録機のセールスマンは当時、歩合制、時に多くの売り上げを達成して青年の頃の夢を実現しようと望遠鏡を購入した。丁度、火星が地球に大接近した時で父の思いは「自分の目で火星を見てみたい」だったと思う。しかし「相談もしないでこんな高いものを」と母は爆発、大変な夫婦喧嘩をやったと母は話した。子供達にとっては後に秋の夜空をただ眺める事だけでなく望遠鏡で月や火星、土星、木星、金星などを見て遠い世界を確かめるという得難い経験を幼いときに味わったのであり大変な教育だった。父はまた大の本好きで、漱石、鴎外、子規、などの全集、円本といわれた世界文学、現代日本文学、日本児童文庫などの全集、岩波文庫、全書が数百冊、専用の書棚があった。また内村鑑三や藤井武の全集など、英語が好きでウェブスターやあの革張りのブリタニカの百科事典まであった。何故か日本の百科事典はなく、また講談社の出世物語本はハッキリと避けていた。そして数百冊の英語の書籍があり、何人かの友人に「君のお父さん、学者？」と聞かれることも屢々だった。私の友人の家に行くと大抵広々とし、また全体にサッパリとした家柄の所が多く、こんなに本がある家はなかったと記憶する。父はまた「書」を好み、戦時中でさえ、食事の後、毎日のように墨をすって新聞紙に何か文字を書いていた。子供達は近くの書道の先生に習字をならわさせられた。

習字を習ったが字が上手だったのは義也、忠幸はしっかりした字を書いた。明は年を経る毎に読めない字になって行った。頭で思っていることを早く形(文字)にしようとするので手が間に合わないのではないか、という人がいたが、あたっているような気もする。これは講演や人に話をするときにも言えることで、父が「明、もっと間を取って話しなさい」と良く言っていた。父の鞆持ちで旅行をし、父の講演を聴いたことがあるが確かに間を大事に話しぶりだった。父は徳川夢声から「間」を学び、お手本にしていたのである。時おり詩吟を談じ、機嫌の良いときは風呂上がりに尻を叩きながら長唄らしきものを詠ったこともあった。しかし、母があまり好きでなかったので、これをやる時は限られていた。父が若い頃はよく子供達をつれて近くの散歩や時に少し遠いハイキングに連れて行ってくれた様だ。残念ながら末っ子の私には、小1の時、父が子供達4人をつれて京王線の高幡不動から野猿峠に行った時のことしか記憶にない。だが、今は地図で見てもどこを歩いたのか解らない。思うほど峠らしき景色は目に浮かばないが何か父と兄弟達で一所に歩くことの楽しさの原点である。また科学博物館や国立博物館に行ったことや萬世橋の鉄道博物館にも連れて行ってもらったことも思い出される。父が博物館に連れて行ってくれた、その思いは何か、世界を、宇宙を考えさせたかったのだろう、とても大切な父からのメッセージである。

7-2 母より、そして雰囲気として：祖母を語ることから始めたい。祖母の名前は「まち」なにか「まちづくり」元祖のような縁も感じるが、何代も続いた油問屋の娘だった。しかし、当時、石油に押されて家が破産、将来に不安を抱え、たまたま通りにあったキリスト教会に入る。そこで大きな癒しを得て熱心な信者になった。牧師パームは「まち」の才能に気づきミッシヨナリーの横浜共立女子で学ぶことを勧めたのである。祖母は喜んでそれを受け、まだ鉄道のない新潟から徒歩で三国峠を越えて表日本の土を踏んだ。どんな思いだっただろうか。日本の中で最も異国的な横浜で生活する。それも日常、英語だけで過ごす寮生活、その中身は「個」を重んじるアメリカ式の発想、価値観、そして生活の中にある衛生思想、この生活空間は全く革命的なものだったに違いない。母は祖母から生まれたときからこの一種の合理主義を受け継ぎ、さらに祖母と同じ横浜共立に学んで磨きかけた。従って二代にわたってこの思想を受け継いだことになる。父には両親がいない、と言うことは母は義母からの要請はない、つまり、幸太郎との結婚は日本的なしきたりや家制度の圧迫のない結婚生活だったのだ。昨今の結婚状況と大差無いと言うことである。幸太郎一忠子の間はそのま民主主義だった。母は結婚したら「洗濯の出来るシーツを上下に敷いたものにしたい」と父に話し、それを実行した。私の少年時代、人様に家に行くと、寝床の多くは「どてら」が主流だったから大正の中頃は完全にそういう世界だったろう。食事も長円型のテーブルと椅子だった。明の大丸テーブル方式の原型かも知れない。決して豊かではない家庭状況だったと思うがその時代では洋風の感覚の大きな家庭だったと思う。今の日本語はカタカナ英語で溢れているが戦前から母が時折口にする英語のフレーズは曖昧母音の（ə）が使い分けられ、日本語にはない音、如何にも英語らしい響きであることを感じていたものである。ピアノは信伯母（後出）が使っていたアップライトの